町 木 津

泉 原

亮

はじめに

「橋守部・純一関係寄贈資料の整理と研究」

田中的再報・橋純一来翰に見る国文学者との交遊

純一に関する資料では、洋装本・写真、書籍などを大半を占めており、特に純一宛の書翰は、未詳の人物の書翰も含め、かなりの数に上る。純一が二十年、三十年であった明治中期から大正期のものは殆ど遺されておらず、師にあたる人物のものが少ないのが惜しまれるが、それでも先輩、同輩、後輩、教え子など様々な人物との交流が窺える好資料である。

著名な国文学者や純一の同級生に限っても、麻生穂次、荒滝邦介、池田亀鑑、内田清之助、岡崎、尾上八郎、片岡良平、重友毅、柴生田穂、下條康雄、守屋健次、小池藤五郎、鴻巣隼雄、慶野正次、小林一郎、小根好日、佐佐木信綱、塩田良徳次郎、中星助、成瀬正勝、沼波守、荻谷林、荻原潤月、久松潜一、人見園吉、平林治徳、福井久蔵、藤村作、
荒瀬邦介（葉書） 昭和二十五年八月八日

あらせ くにすけ

国文学者。山口県出身。生没年未詳。

『清翠亭名作選』（昭和四年・文献書院）
『引歌類纂抄』（昭
東京都大田区田園調布（局区内）久ヶ原町四十八
橘 純一様

山口市大字平井山口（局区内）荒瀬 邦介

八月六日（明治25年8月8日）

玉縄有難く拝誌。其後御なし及しして居ります。益々御健勝の由、お慶び申上げます。小生も謹様で無事消日、当地女子短期大学へ週三日八時間（受講学科は貴下と同じ）、野田高等学園へ周三日六時間勤務、尚此年に當市会議員・教育委員長をつとめ、嫁も相手に五反農耕、老疾を鞭打って殆ど寸暇なく、精神的に又肉体的に、最後の奮闘を続けで居ります。市会議員も来春三月まで期、再出馬をすすめられて居りますので、目下其の考で進んで居りますので、当選すれば学校側と絶切れとなり、少々余暇も出来ることと思ひます。矢張り精神の緊張が健康には極めて好結果をもたらすように思ひます。先は近況御報告傍々、御芳情に対し厚く御礼申上げます。敬具

【余説】

荒瀬邦介は、山口高等学校を経て東京帝国大学に進み、明治四十二年に文科大学国文学科を卒業し、橋純一の東京帝国大学における同級生である。昭和二年（一九二七）設立の京都府立女子専門学校（京都府立大学の前身）に奉職し、同校長を務めた（昭和十年六月）。この書簡が書かれた昭和二十五年は、橋純一にとって二十四年四月から専任教
内田清之助
（葉書）昭和十三年六月二十七日

内田清之助
（葉書）昭和十三年六月二十七日

内田清之助
（葉書）昭和十三年六月二十七日

内田清之助
（葉書）昭和十三年六月二十七日

内田清之助
（葉書）昭和十三年六月二十七日

内田清之助
（葉書）昭和十三年六月二十七日

内田清之助
（葉書）昭和十三年六月二十七日

内田清之助
（葉書）昭和十三年六月二十七日

内田清之助
（葉書）昭和十三年六月二十七日

内田清之助
（葉書）昭和十三年六月二十七日
内田清助と橋一とは、市川小学校・府立一中・同級生で、高等教育学校で内田は二高（二部）、橋一は二高（二部）に進み、東京帝国大学では橋一が文科大学文学科（国文学専修）を、内田はさらに大学院に進学し、学術学部を修めた。内田はさらに大学院に進学し、学術学部を修めた。
ここで純一の五回にわたる主張を摘要しておこう。六月号の『小学国語読本巻十』『源氏物語』の削除を要求するのに、稲葉は、『源氏物語』の文章に「頑廻した感情」が「かなり濃厚に」現れており、『文芸としてすぐれたものである』かどうかでは、同号後記において、『源氏物語』を『国民的作品』ではない、階級的作品である、『文学として美であるか』と問いかけて、『天の子の父兄各位』に対して「愛見ただが、国家の強制の下、此の作品を純一の作品評価として見ることが出来るものならば味深い見解である。七月号では『本物語の価値は、宣長翁の「物語の尺五巻を仮にかくふふ、多大の犠牲を払って、国史に最も自覚を得た」と理由として、純一は「皇室の御尊厳に対し、現代日本は、昨年五月国の事変以後現在に至る期間を仮にかくふふ、多大の犠牲を払って、国史に最も自覚を得た」と理由として、純一は「皇室の御尊厳に対し、現在の頑廻した感情は、かなり濃厚に現れており、『文芸としてすぐれたものである』かどうかでは、同号後記において、『源氏物語』を『国民的作品』ではない、階級的作品である、『文学として美であるか』と問いかけて、『天の子の父兄各位』に対して「愛見ただが、国家の強制の下、此の作品を純一の作品評価として見ることが出来るものならば味深い見解である。七月号では『本物語の価値は、宣長翁の「物語の尺五巻を仮にかくふふ、多大の犠牲を払って、国史に最も自覚を得た」と理由として、純一は「皇室の御尊厳に対し、現在の頑廻した感情は、かなり濃厚に現れており、『文芸としてすぐれたものである』かどうかでは、同号後記において、『源氏物語』を『国民的作品』ではない、階級的作品である、『文学として美であるか』と問いかけて、『天の子の父兄各位』に対して「愛見ただが、国家の強制の下、此の作品を純一の作品評価として見ることが出来るものならば味深い見解である。七月号では『本物語の価値は、宣長翁の「物語の尺五巻を仮にかくふふ、多大の犠牲を払って、国史に最も自覚を得た」と理由として、純一は「皇室の御尊厳に対し、現在の頑廻した感情は、かなり濃厚に現れており、『文芸としてすぐれたものである』かどうかでは、同号後記において、『源氏物語』を『国民的作品』ではない、階級的作品である、『文学として美であるか』と問いかけて、『天の子の父兄各位』に対して「愛見ただが、国家の強制の下、此の作品を純一の作品評価として見ることが出来るものならば味深い見解である。七月号では『本物語の価値は、宣長翁の「物語の尺五巻を仮にかくふふ、多大の犠牲を払って、国史に最も自覚を得た」と理由として、純一は「皇室の御尊厳に対し、現在の頑廻した感情は、かなり濃厚に現れており、『文芸としてすぐれたものである』かどうかでは、同号後記において、『源氏物語』を『国民的作品』ではない、階級的作品である、『文学として美であるか』と問いかけて、『天の子の父兄各位』に対して「愛見ただが、國家の強制の下、此の作品を純一の作品評価として見ることが出来るものならば味深い見解である。七月号では『本物語の価値は、宣長翁の「物語の尺五巻を仮にかくふふ、多大の犠牲を払って、国史に最も自覚を得た」と理由として、純一は「皇室の御尊厳に対し、現在の頑廻した感情は、かなり濃厚に現れており、『文芸としてすぐれたものである』かどうかでは、同号後記において、『源氏物語』を『国民的作品』ではない、階級的作品である、『文学として美であるか』と問いかけて、『天の子の父兄各位』に対して「愛見ただが、國家の強制の下、此の作品を純一の作品評価として見ることが出来るものならば味深い見解である。七月号では『本物語の価値は、宣長翁の「物語の尺五巻を仮にかくふふ、多大の犠牲を払って、国史に最も自覚を得た」と理由として、純一は「皇室の御尊厳に対し、現在の頑廻した感情は、かなり濃厚に現れており、『文芸としてすぐれたものである』かどうかでは、同号後記において、『源氏物語』を『国民的作品』ではない、階級的作品である、『文学として美であるか』と問いかけて、『天の子の父兄各位』に対して「愛見ただが、國家の強制の下、此の作品を純一の作品評価として見ることが出来なもの
東京市本郷区駒込西片町○番地ノ一
電話○川千七十番
熱海市西山町立石第臥龍組
佐佐木信綱
昭和二十年七月八日
消印「20・7・12」

（郵便局に申す
万一大泉館災にあれば候は
陸軍士官学校配達なし下されたく候）

欄外 余白に御返事願上候

一、当地には、書物いさか持来り候のみにて、橋守部翁の家集も持参せず、その為の御伺ひに候。唯今御国につくし

てはわたくし事にてどうでもよき事、又いそがぬ事にて候。幸に長らへ居候はさ、自身の年譜まとめ置く、伊勢

小向に守部翁の記念碑の料にて拙き歌を寄寄候をやうの記憶あり。もし建設せられ候はさ、その年月と歌と御わかり候はさ、

御かきぬき給はらは_Title未定_候。又書物の名は橋守部歌集なりしや、それも御しらせ願上候。

以下三行空白

奥様にもよろしく御申上願候。

御本宅御さはりなきやう祈上候。
昭和十八年の四月の末、
生まれの大喜にかかって数月を
臥床に過ごした。
幸に西川、
山川二博士のおかげにより、
蘇生することができたが、
その後は一方に静養しつつ、
一方に早年の著作に専心した。

【余説】

信綱は、純一が逝去した際
に「かなしきかも守部の
大人の後をうけて道を
はるままな君」と思い
たる小向神社（三重県四日市
市日町小）境内に建てられた
「登橋守部歌」の碑
をふけのやこいにおいた
ことである。熱海市の
社友の家に移住したについて
は、信綱自身に

昭和七年八月、小向神社
（三重県四日市市
日町小）境内に建てられた
「登橋守部歌」の碑
をふけのやこいにおいた
ことである。熱海市の
社友の家に移住したについて
は、信綱自身に

昭和七年八月、小向神社
（三重県四日市市
日町小）境内に建てられた
「登橋守部歌」の碑
をふけのやこいにおいた
ことである。熱海市の
社友の家に移住したについて
は、信綱自身に

昭和七年八月、小向神社
（三重県四日市市
日町小）境内に建てられた
「登橋守部歌」の碑
をふけのやこいにおいた
ことである。熱海市の
社友の家に移住したについて
は、信綱自身に

昭和七年八月、小向神社
（三重県四日市市
日町小）境内に建てられた
「登橋守部歌」の碑
をふけのやこいにおいた
ことである。熱海市の
社友の家に移住したについて
は、信綱自身に

昭和七年八月、小向神社
（三重県四日市市
日町小）境内に建てられた
「登橋守部歌」の碑
をふけのやこいにおいた
ことである。熱海市の
社友の家に移住したについて
は、信綱自身に

昭和七年八月、小向神社
（三重県四日市市
日町小）境内に建てられた
「登橋守部歌」の碑
をふけのやこいにおいた
ことである。熱海市の
社友の家に移住したについて
は、信綱自身に

昭和七年八月、小向神社
（三重県四日市市
日町小）境内に建てられた
「登橋守部歌」の碑
をふけのやこいにおいた
ことである。熱海市の
社友の家に移住したについて
は、信綱自身に

昭和七年八月、小向神社
（三重県四日市市
日町小）境内に建てられた
「登橋守部歌」の碑
をふけのやこいにおいた
ことである。熱海市の
社友の家に移住したについて
は、信綱自身に

昭和七年八月、小向神社
（三重県四日市市
日町小）境内に建てられた
「登橋守部歌」の碑
をふけのやこいにおいた
ことである。熱海市の
社友の家に移住したについて
は、信綱自身に

昭和七年八月、小向神社
（三重県四日市市
日町小）境内に建てられた
「登橋守部歌」の碑
をふけのやこいのお
大森区久ヶ原町二九五
橋
純一先生
侍史

世田谷区代田の一〇三
柴生田

拜啓
文書書きで失礼申上ます。国語解釈をわざわざ御恵下されまして、ありが頂戴いたしました。実はあとから国語解釈に出たのでなかったけれど、心づきしましたが、既におそく御親切に御教示にあつかりまして、恐縮の至るござい

何か自然で、山田雄氏説のときとはどうも不自然のようにも思われます。常に、流氷の木多底（四〇九六）の一例は、

奈良朝時代に於ては、下二段、さ変、か変等四段と同様「よ」のつくことを要しなかった、と考へられますので、これ

は解答にも触れられていますが、なお下二段の例として、仏足石歌の「都止米呉吕呉須呉売呉呂の如きあり、か変

も源氏物語を引くまでもなく万葉集にも用例があります」この例は、統計のaよりもcに入れるべきものかと考慮いたし
ます。
それでも、他動四段と認められるものは、『鶴川立』の三例と考えられ、これは答解にありますように、『固定した用法』である点が弱みかつ存在されます。それに私にはどうも『四段に対して四分の一の対抗力を持ってゐる』とまでは考えてなりませんのでございます。

平安朝和歌に於ける『名を立つ』の慣用例は、確に興味のある現象であり、もっと検討を要する問題であると存じます。

ただこれも後の特殊用法ゆえ、万葉の訓を決定する材料としては答解の態度もそうであつてどうか、大いに有力頭々ではあるか、というのが只今の私の気持ちでございます。

草枠の中に書きつけましたので、思考誤りも定めし違らせなやうに恐れてもいります。但し、この他動四段の『立つ』を認めんとする気を持ち、全くかうふ特定例に無知であるかのように感じさせてくれる』というふる気持たれは、御同感出来ぬかなればならぬと考えてゐます。望をいたします、なる御指導を得ならば幸甚に存じます。御親切なる御教示にあまえて、ついくどかと書きつけました。
[余説]

柴生田は、昭和十五年十一月に、陸軍予科士官学校国語教授を嘱託されている。本務は明治大学予科教授。翌年七月には、明治大学を退職し陸軍教授。そこで当時国語教授であった柴生田は、もう少し他人の授業を参観しなさい。増渕君（恒吉）はうまくから、あれを見たらいよ」と言ったそうである。[長野貞一『学者評判記』上]昭和十三年四月赴任

本書翰は、純一から『国語解釈』が送付されたことに対する礼状である。その内容については純一の示唆を得たものである。当該の『国語解釈』は昭和十三年十一月に刊行されている。なお、増渕恒吉の純一宛書翰も寄贈資料のうちに存す

左の歌の第五句『名者不立之而』を『名は立たずして』と訓むのと、『名は立たずして』と訓むのといつがよいとせ

うか。（なおこの歌は小学読本巻二に出てある）

この『課題』が『国語解釈』十一月号に掲載され、それに対する『答解』が十二月号に示された。九氏の『答解』に続き、

万葉集八・山上懐良
次田 潤
（封書） 昭和十八年十月十三日

つぎた うるう 国文学者 明治十七年（一八四四） 昭和四十年（二九六〇） 戦後は立正大学教授を務めた。

大森区久ヶ原町二九五
橋 純一様

豊島区池袋三丁目一五三九
次田 潤

両新説（大正十年、成美堂、古事記新説（大正十三年、明治書院）など。

拝啓
その後懸くお目にかわりませんが、相変わらずお元気で何よりの事に存じお喜び申上げます。

さて此度は、守部翁の名著経典言別を御校訂になり、いよいよ御出版になりました。について御心にお掛け下さり早速一

部御恵み下さりまして、御高情のほど誠にあり難う存じます。丁度記録書序につけ調べをしております折からと、早速利用

させておりますが、一巻に述べましたものは何かと便利に存じます。重ねて篤く御礼を申し上げます。

先般来息息が芝京学校へ御採用下されฌスクならば、親としてもこの上なき満足でありります。何れ参上御願申し上げたく存じて

ます。万一御尽力に御採用下されませぬならば、親としてもこの上なき満足でありります。何れ参上御願申し上げたく存じて

ます。
疎経
－次田潤とは、東京帝国大学同志年表（明治四十二年）である。純一が自ら校訂をとした守部の著『稲威言別』
昭和十八年、富山房を送付したことに対応しての礼状である。書翰中『大正学校』を志望している「愚意」とあるはず、潤
十七年、陸軍航空学校に職を奉じている。なお、寄贈資料中、潤の長男真幸、お茶の水女子大学教授、上代文学、一九
一九九三年の書翰も存する。
東條
操（封書）昭和二十五年八月十七日
とうじょうみさお
国語学者、学習院大学教授。明治十七年（一九四四）昭和四十一（一九六六）。『国語学新論』
昭和二十六年、東京堂『分類方言辞典』（昭和二十九年、東京堂）など。
大田区田園調布地区久原町四丁目二一
東條
操
八月十七日
東京都練馬区内幡玉北四丁目二一
東條
操
昨日は七時近くに帰宅、一回まで練馬の奥に御足を御連び願った事を承り大に恐縮して居ります。
昨日、福井先生の事、老生もいつも気にしながら御承知の激性と不精と為め、そのままにして居りました。
先生の御そばにも上って居りませんが、近頃いくらか御元気はないのではないかと思いつつ居ります。大兄がお乗出し下さるのはまことに幸です。騒尾に附いていくらかでも御役に立ちたいと存じます。この件では山岸德平さんも心配して居られます。あの人は中々やり手ですから相談に乗っていただきたいものです。

さて、来週月曜日二十一日、午後一時学習院研究室まで御迎び下さらるとの御指示ですが出、何とか先生に喜んでいただいたければと存じます。度は老生が同日見学園短期大学に大兄を御送りいいたします。どうぞ一時少し過ぎまで詰見でお待ち下さいませんか。もとより御出校の時間によっては午前中に参上してもよいのです（詰見は例の卒業会館の裏です）。御待たしいと思います。

東條生

大兄、侍史

八月十七日

【余談】

話が行き違ふといけませんから、御不都合でない限り詰見で御待ち願いたいと存じます。
中勧助
（葉書） 昭和二十四年四月六日

なか
かんすけ
小説家 明治四十二年  東京帝大卒業

中勧助
（葉書） 昭和二十三年四月六日

なか
かんすけ
小説家 明治四十二年  東京帝大卒業
卒業以来四十年もお目にかかる機会を得ませんでしたが御機嫌宜しくて頂上に存じます。学校時代の御様子はよく覚えておりますがどこかで偶然お逢いしましたとても到底わかりませんで情を頂きました。十八名の同期卒業者中過半数逝去とは何か心細さ次第。併し大変暖かいうちにも今度の爆発にも命拾いをしましたのはお互いまざまず幸運の方と思ひます。

【余説】

帝大卒業以来四十年ということは、昭和二十四年の葉書ということがなろう。「次田氏」は、東大同期卒業の次田潤（一八四一九六六）次田氏は、当時立正大学教授（国文学科主任）古事記の研究家として著名である。「国語国文学会」は、東大同郷卒業の瀬尾武次郎。「講曲の研究」（大正三年）内藤金松堂・山口屋書店」という著者のある国文学者であることを知られるものの、伝記は未詳。十八名の同期とは、次田潤・青木正・高木武・山崎隆・橘純一・林起・中勘助・荒瀨邦介・塚田芳夫・宮本のことをある。過半数逝去」とあるが、「東京大学卒業生氏名録」（昭和二十五年、東京大学）に掲げば、物故者は、中京を附した七名である。
福井
久蔵
（封書）
昭和十年五月二十五日

ふくい ひろると

国語学者・国文学者

四十年、大日本図書、『日本新詩史』（大正十三年・立川書店）、『日本歌謡新解』（大正十三年・不二書房）、『連歌乃史的研究』（昭和五年・不二書房）、『国語学大系』（昭和十三年・昭和三年、不二書房）

大森区久ヶ原町二九五
橋 純一 様
私に即時御傾用

五月廿五日

池袋三一三七
福井 久蔵

連日雨もよう別に御暇でも御座なく候や。駒沢には多年御居せずいたき候事やえ、送別会開催の件、高村君に依頼いたし

居候へとも。また其運に不到、失礼仕居候。貴下には士官学校の方、国文科の統一や教科書編篡など御多用之趣、いつも仕事に御熱心之御性質むりをささらぬよう切に希望いたし居候。安藤正次君を御頼いたし居候処。全君台湾大学総長に任命相成につき、東洋大学部本年、国語學

概論講義の事に定まり居。安藤正次君を御願いたし居候処、全君台湾大学総長に任命相成につき、東洋大学部本年、国語學

概論講義の事に定まり居。安藤正次君を御願いたし居候処、全君台湾大学総長に任命相成につき、東洋大学部本年、国語學

概論講義の事に定まり居。安藤正次君を御願いたし居候処、全君台湾大学総長に任命相成につき、東洋大学部本年、国語學

概論講義の事に定まり居。安藤正次君を御願いたし居候処、全君台灣大学総長に任命相成につき、東洋大学部本年、國語學

概論講義の事に定まり居。安藤正次君を御願いたし居候処、全君台灣大学総長に任命相成につき、東洋大学部本年、國語學

概論講義の事に定まり居。安藤正次君を御願いたし居候処、全君台灣大学総長に任命相成につき、東洋大学部本年、國語學

概論講義の事に定まり居。安藤正次君を御願いたし居候処、全君台灣大学総長に任命相成につき、東洋大学部本年、國語學

概論講義の事に定まり居。安藤正次君を御願いたし居候処、全君台灣大学総長に任命相成につき、東洋大学部本年、國語學

概論講義の事に定まり居。安藤正次君を御願いたし居候処、全君台灣大学総長に任命相成につき、東洋大学部本年、國語學

概論講義の事に定まり居。安藤正次君を御願いたし居候処、全君台灣大学総長に任命相成につき、東洋大学部本年、國語學

概論講義の事に定まり居。安藤正次君を御願いたし居候処、全君台灣大学総長に任命相成につき、東洋大学部本年、國語學

概論講義の事に定まり居。安藤正次君を御願いたし居候処、全君台灣大学総長に任命相成につき、東洋大学部本年、國語學

概論講義の事に定まり居。安藤正次君を御願いたし居候処、全君台灣大学総長に任命相成につき、東洋大学部本年、國語學
福井の履歴は、渡辺三男「福井久蔵博士の人と学問」に「駒沢国文」に二十号、昭和五十八年二月）が参考になる。それによれば、兵庫県師範学校を出した福井の教えは、神戸区高等小学校教諭（一九九氏九四）を経て、東京府立第一中学校教諭（一九〇氏九四）に参加するかたわら、東京外国語学校でドイツ語を学んだ。ついで上田万年の推挙により学習院教授（一九〇氏九四）となり、さらに駒沢大学教授（一九五四）に昇進した。

橘文庫には「福井久蔵先生」という欄に見える役職名が記されている。それらの三十五年三月卒業組は「如蘭会三五会」という同窓会を結成しており、「如蘭会」は府立一中・日比谷高校同窓会の名称で、とりわけ結団が固かったとのみられる。前記「芳名録」から著名人をひろえ、三十三年
藤村（作）
昭和二十年十二月九日

ふじむら つくる
国文学者。
東京帝国大学教授。
明治八年（一八七五）昭和二十年（二九五三）。

大森区久ヶ原町二五
橘

世田谷区鳥山町六九〇
藤村（作）

（消印）（20・12・□）

敬啓
貴下益御健在、邦家の為に奉斎賀候。
さて帝国は今や千古未有の大難局に逢著致し、職に御同憂に不堪候。

貴下届けの御日前に御願申上候方々の御会合を願ひ、御高見拝聴且御相談申上度存

郷区元町日本出版文化協会会議室（五階）に於て発起人に御願申上候方々の御会合を願ひ、御高見拝聴且御相談申上度存
【談沙】

森 百 商

十両四两田

観覧賞観を増進せり。此之等の観覧に際しては、観覧者の中には、特にこの観覧に対する興味をもつ者があることわざわざ指摘している。
に掲げられている。最晩年の病床で門人に「現今の精神的な頼り所として、是非とも新憲法の前文を推奨したい」と書いている（鶴見

森繁夫（筆者）　昭和四年七月十五日

情報総合センターに「森文庫」としてのもの。人物多読（昭和十八年、二三書店、「古筆鑑定と極印」（昭和十八年、雅俗山荘）、『名家伝記資料集成』（昭和五十九年、思文閣出版）など。"
候。末人失礼之儀に候も、御実費を含む御記念会々費といふやうなもの有之候は。その方にて何程か為送いたし候か、大下よりへし御縮の半折は、過日貴地の至聖に上候。先は右不取敬御請御礼まで申上度如斯御座

餘言

森繁夫は、撰陽汽船・大阪商船などの要職にあった関西海運業界の人物で、かたわら佐佐木信純門下の歌人、また短冊の取集家としても知られ、国学者・歌人を中心とした近世人物伝に精通した『名著伝記資料集成』の編著者歴史に演した。本編は、純一が私家版として発行した『贈位記念櫻花部伝記資料』（昭和三年四月）、前記の伝記資料をこれを機会に作成されたものである。森が純一から送られたのに対

森がその事跡を発揚して世に紹介した人物である。
図版1：中勘助案書（昭和24年4月6日付）

図版2：福井久蔵書翰（昭和16年5月15日付）
図版 3：藤村作書翰（昭和 20 年 12 月 9 日付）

図版 4：森繁夫書翰（昭和 4 年 7 月 15 日付）